

人間は生き返ると信じている子供たち

さだ まさし

ちょっと前に新聞に出ていたアンケート調査でびっくりしたのは、「人間は生き返る」と思っている子供たちが一五パーセントもいることですね。

長崎県の教育委員会が、小中学生を対象に行ったアンケートで、「死んだ人が生き返ると思いますか」という問いに対して、「はい」と答えた割合が、小四で一四・七パーセント、小六で一三・一パーセント、中二で一八・五パーセントだということです。

小学生より中学生の方が数値が高いのも愕然としますが、そもそも人間が生き返るなんて誰が、一体どのように教えたんでしょうか。

理由として挙げられていたのは、「テレビや本で生き返る話を聞いたことがある」とか「テレビや映画で生き返るところを見た」とか、そういうことなのですが、そんなものは僕らが子供の頃にもあった。でも、誰も「人間は生き返る」なんて思ってやしません。物心つく前からともかく、中学生にもなってそんなことを平然と言うやつはいなかった。

アホらしいとは思いますが、こういう教育もちゃんとやった方がいいのかもしれない。理由が育つ前の子供は、簡単に騙せるし、まやかさも信じてしまう。大人ですら「死んでも生き返る」と信じこんでしまい、宗教まがいの詐欺に引っかかる場合があります。優れた霊能者や異能力者の存在は否定しませんが、奇蹟と手品とは紙一重なのだ、と知るべきです。

僕なりに考えれば、子供たちにとって「死」が身近な存在ではなくなってしまうたんですね。「生命」は病院から来て病院に帰って行く、と思う子供もあるかもしれない。お産も病院で、亡くなるのも病院ですからね。

死んだ経験など誰にもないから、「生と死」が身近にないと、「漫画やアニメの世界」と現実との区別がつかず、「死んでも生き返る」と思いこむ子供はいると思います。

かつては——それこそ獣に囲まれて暮らしていた頃は——いつ死ぬか分からなかった。文字通り、死と隣り合わせの生活だった。今でも、国によっては、こんなに産んでどうするの、というくらい子供を産むところがある。産まれて人が増えたら食って行くなんでどう考えても無理な程に。

あるドキュメンタリーで、「こんなに生活が苦しいにもかかわらず産み続けるのは何故？」と聞かれてその母親はこう答えました。「だって子供はすぐに死ぬから」と。乳幼児死亡率を抑えるための社会態勢が出来ていない国での話です。

だからそこでは、「死」は身近な存在なのです。

獣に怯える時代を過ぎ、身を守る方法を覚え、病魔からもある程度逃れられるようになり、戦争の記憶も薄れた。いやもう「無い」と言っている。この日本には目に見える国境がないから、無理矢理にでも「国」という概念で国民を縛ったり、旗印や唄のようなものでいちいち確認しながら結束する必要もない。そんな国では生命に対して思い上がるな、という方が無理かもしれませんね。

死をイメージできず、生への感謝も希薄。となればこれはあくまで極論ですが、大災害や大破壊に直面しなければ「この国の人の心は治らない」と、諦めたくなくなってしまいます。

いえいえ、絶対にそういうことが起きては困ります。

人の心根を諦めたくないのです。

この本の仕上げにかかるのか、という二〇〇六年一月十四日に、小学校時代からの親友の裕ちゃん、平山裕一君の奥さん、吟子さんが急逝しました。

急性心不全。夜眠ったまま、朝には亡くなっていました。

吟子さんはまだ五十二歳になったばかり。友人たちも夢にも思わなかったことで数日眠れぬ夜を過ごしました。友人ですらそうですから、夫の裕ちゃんの思いは想像に余りあります。

あわてて駆けつけた通夜の席で裕ちゃんが吟子さんの遺影を見上げながら、「もうすこし優しくしてあげれば良かった」と呟きました。

「いや、裕ちゃんは十分に優しくかったよ」。僕がそういうと、彼は寂しそうに「そうかなあ」と応えました。

佐賀県出身の彼女は、松下冷機のデザイナーとして関西で就職した裕ちゃんと結婚後、ずっと奈良市内で暮らしていました。

明るく行動的な美人で、知り合ったひとはみな吟子さんのファンになったくらいです。

主婦としても二人のお嬢さんを、優しくて美しい、すばらしい女性に育て上げ、この後は大好きな夫の裕ちゃんとのんびり老後を過ごすはずでした。

「いつかまさしさん、〇〇神社の〇〇〇という行事を見に行きましょう」

「必ず〇〇寺の〇〇という祭事を経験してね」

奈良が大好きな彼女は、もっともっと奈良のことを自分で知り、その素晴らしさをたくさんの人に伝えたかったはずです。

彼女はもういないけれども、僕は彼女のそういう志を死ぬまで忘れません。

一体人の生命は誰のものなのでしょうか。

こうして心の準備もできないままに、突然いなくなられてしまうと、今更ながらに気付かされることがあります。

それは、「生命や人の心」に対しては、決して油断してはいけない、ということなのです。

ちよっと気を緩めたが最後、簡単に壊れるし、簡単に消えてしまう。

まだまだ元気だと勝手に思い込んでいるから、色々なことを「今度」でいいと先送りにしてしまうけれども、今の生命には今しか向き合えない。生命に対して、思い上がってはいけない、ということなんですね。

長崎の新天地、中華街で「江山楼」という中華料理屋をやっている僕の兄貴分の王囿雄おうくにおさんが、

彼の大切なお母さんが亡くなった年の、精霊流しの晩、僕に言った言葉を思い出します。

「親が生きているうちに孝行しろ、という言葉があるけど、それは間違いだ」

驚いた僕が「え？間違いなの？」と聞き返すと、彼は、

「間違いだ。孝行は、親が生きているうちにしたんじゃ遅い。親が、『元気』なうちにするのが孝行だ。孝行する気があるなら、親が元気なうちにしてあげてくれよ」

と、そんなふうにした、その言葉が忘れられません。

この世の中のたくさんの「元気」な生命を、私たちはもっともっと大切に守ってゆかねばなりません。

そしてそれは、身近な「家族」の生命から始めるべきだと思うのです。

さだまさし『本気で言いたいことがある』（新潮社）より